令和４年度　函館市総合教育会議　会議録

１　日　　時　　令和４年１１月２５日（金）　午前１０時
２　場　　所　　函館市立本通中学校　大会議室
３　出 席 者　　【構成員】
工藤市長，辻教育長，藤井委員，小葉松委員，神田委員，國谷委員
【事務局】
川村生涯学習部長，小笠原学校教育部長，吉本生涯学習部次長，
清藤生涯学習部次長，金野教育政策推進室長，渡邊管理課長，
白川学校教育課長，中田教育指導課長，木村教育政策課長
【発表者】
本通中学校　仲井校長，菅原教頭，滝花教諭
【その他】
山本ＩＣＴサポーター，竹澤ＩＣＴサポーター
４　欠 席 者　　なし
５　傍 聴 者　　報道関係者　４名
６　次　　第　　１　開会
２　協議事項
（１）ＩＣＴの効果的な活用による学びの充実について
ア　説明「教育委員会の取組について」
イ　事例紹介「本通中学校の取組について」（事例発表，校内視察）
ウ　意見交換
（２）その他
３　閉会

１　開会
■金野教育政策推進室長
皆様おはようございます。ただいまから，令和４年度函館市総合教育会議を開催いたします。
私は，議事に入るまで進行を務めさせていただきます，教育委員会学校教育部教育政策推進室長の金野でございます。どうぞよろしくお願いいたします。
はじめに，会議の主催者であります，市長からごあいさつをいただきます。工藤市長，よろしくお願いいたします。
■工藤市長
改めまして皆様おはようございます。本日は総合教育会議にご出席，誠にありがとうございます。また，委員の皆様には日頃から本市の教育行政の推進のために，大変ご尽力いただき，感謝申し上げたいと思います。
この会議は，昨年，戸井学園で開催いたしましたけれども，非常に印象に残っております。それから１年が経ったわけですが，依然として新型コロナウイルスが，現在第８波と言われており，私自身，先日コロナに感染しましたけれども，学校も含めて，非常に感染者数が増えてきて対応に追われておりますが，一方で少しずつ賑わいが，観光客も，あるいは市

民生活も含めて，戻りつつあるのかなと考えているところであります。ただ，１日の新規感染者数，先日も６１１人と過去最多となりました。重症者化する人は少なくなっているのですが，病床使用率が５０％を超え，レベル３に実質なっている状態で，医療が非常に難しい状態になっているわけでありまして，子どもたちをはじめ，市民一人ひとりに基本的な感染対策をとっていただいて，市としても感染防止対策に努めるとともに，その一方で市民生活や経済活動などの回復に向けても取り組んで行きたいと思っています。

学校においてもクラスターが起きたり，大変な状況なんだろうと思うわけであります。そこを今まで以上に気を付けていただいて，今までも気を付けていらっしゃると思いますが，私も飲食で感染したわけではなくて，マスクしても感染している。非常に感染力が強いなと思います。私の場合，軽症といいますか，ほとんど症状がなく，熱もなく咳もないし，喉がちょっと変だなというぐらいで，それはワクチンの効果かなと思いますので，できるだけ，体質的に問題ある方は別として，ワクチン接種を積極的に考えていただければと思っております。

そして，そういう中で物価高騰の影響を受けている，学校に通っておられる児童生徒の保護者のみなさんの教育費の負担軽減として，就学援助の拡充や学校給食の食材購入費の補助なども実施してきたところでありますが，今後もまだまだこの事態，コロナ禍での物価高・原油高という状況は，しばらく続くものと思われますので，引き続き各種支援に力を注いでまいりたいと考えております。１２月議会では就学援助をこれまでの生活保護基準の１．３倍から１．５倍にまで拡大し，また，これまで費目として見てこなかったＰＴＡ会費と生徒会費の２つも新たに加えるということです。学校給食等についても３分の１近い児童生徒がほとんど無料化になっているということであります。加えて，来年度の学校給食費も値上げをしないということで，これも１２月予算に，来年度の市の負担の方も計上することで保護者負担の高騰を招かないということを考えているところであります。

こうした中で，各学校では日常的に感染予防に努めながら教育活動を進めるとともに，保護者や子どもたちの不安の解消，あるいは不登校の児童生徒への対応なども教職員一人ひとりが創意工夫しておられると聞いております。本市の学校現場において，大きな混乱も無く教育活動を続けていることは先生方の日々の努力のおかげと感謝申し上げたいと思います。

先日も校長会のみなさん，あるいはＰＴＡのみなさんと懇談をさせていただいて，様々な課題についてお聞きいたしました。市といたしましても，子どもたちが一人でも取り残される事のないように学習機会の確保，そして学びの充実，教育環境全般的な整備に向けて教育委員会のみなさんと連携してまいりたいと考えております。

今日は，本通中学校のＩＣＴ環境での授業の様子を拝見させていただくとともに，ＩＣＴの効果的な活用による学びの充実をテーマに，函館のこれからの教育について意見交換を行ってまいりたいと思います。ＩＣＴについては，先日の校長会のみなさんからも様々なご意見をいただいたところであります。

委員のみなさんには，忌憚のないご意見をいただきますようにお願い申し上げます。どうぞよろしくお願いいたします。

■金野教育政策推進室長

ありがとうございました。それでは，次第の２，協議事項に入らせていただきます。「函館市総合教育会議の運営に関する要綱」第３条の規定に基づきまして，会議の進行を，市長にお願いしたいと思います。市長，よろしくお願いいたします。

２　協議事項

■工藤市長

それでは，次第に沿って議事を進めたいと思います。協議事項の（１）「ＩＣＴの効果的な活用による学びの充実」について，説明をお願いいたします。

■小笠原学校教育部長

教育委員会学校教育部の小笠原と申します。「ＩＣＴの効果的な活用による学びの充実に向けた取組について」，ご説明させていただきますけれども，こちらの大型ディスプレイまたはお手元のタブレット，どちらかを見ていただきながら，お聞きいただきたいと思います。

まず，各学校におきましては，現在教育の情報化が進められております。その背景といたしましては，「Society5.0」時代の到来が予測されていることが挙げられます。「Society5.0」時代におきましては，グローバル化ですとか，とりわけＡＩ，ビッグデータ，ＩｏＴなど，先端技術の高度化が進みまして，社会の在り方が劇的に変わるとされております。ＩＣＴを日常的に活用することが当たり前の世の中におきまして，情報や情報技術を主体的に選択して，効果的に活用する力というものが重要になってまいります。

こういった背景の中で，学校指導要領でございますが，小学校におきましては令和２年度から，中学校では令和３年度から新しい学習指導要領が全面実施となっております。この中では，言語能力と同様に，情報活用能力が「学習の基盤となる資質・能力」と位置付けられまして，様々な場面で育成をすることですとか，教育の情報化に係る内容の一層の充実が図られたところでございます。

また，「ＧＩＧＡスクール構想」として，特にＩＣＴ機器の整備状況が，地域間で格差が大きいことですとか，それから学校においてはＩＣＴの利活用が世界に比べて遅れているということもございます。そういうことを踏まえまして，学習用端末ならびに高速大容量の通信ネットワークの整備が全国的に進められてきたところでございます。

本市におきましてもＩＣＴ環境の整備として，令和２年度から「ＧＩＧＡスクール構想」を進めています。すべての小学校・中学校・義務教育学校に，学習用の端末ならびに高速大容量の通信ネットワークの整備を行ったところでございます。また，今年度は端末を活用した学習を効果的に行うことができるように，大型ディスプレイですとか，それからChromecast（クロームキャスト），さらにはＷｅｂカメラなどを整備したところでございます。

このようにＩＣＴ環境の整備がされたことによりまして，学びの変化というものも生まれております。国からも示されておりますが，これまでと比較しまして大きく３点，１点目としては，教師が児童生徒の反応を踏まえながら，授業を行うことが容易になったということです。双方向型の一斉授業が行いやすくなったということが１点目として挙げられます。２点目としましては，児童生徒一人ひとりのニーズや学習状況に応じた個別学習が可能になったということが挙げられます。３点目といたしましては，児童生徒が個々の考えや意見を即時に共有できるようになったということが挙げられます。このように，学びが変化した様子が見られているところでございます。

では，具体的に学校の様子をご紹介させていただきたいと思います。まず，スライドの左側をご覧いただきたいのですけれども，こちらは駒場小学校の授業の様子でございます。学習用端末を用いて，一人ひとりの考えを大型ディスプレイに表示しております。そしてそれに基づいて説明をしているところでございます。この際に，一人ひとりの子どもたちの個別の端末から大型ディスプレイの画面に，画面を共有するために使っているのが先ほどご紹介しました Chromecast（クロームキャスト）です。

それからスライドの右側にございますが，こちらは北中学校の授業の様子でございます。Ｗｅｂ上のアンケートフォームのような機能がありますGoogle Forms（グーグル・フォーム）を使いまして，授業の終わりに振り返りを行っているということでございます。回答の確認や集計が瞬時にできるということで，授業の理解度をすぐに把握することができるといった状況になっています。

続きまして次のスライドをご覧ください。椴法華中学校の様子が左側に出ております。これまでは外部講師を招きまして，薬物乱用防止教室を行っていたんですけれども，Ｚｏｏｍによって開催したという様子です。コロナ禍で，講師の函館税関の職員の方が来校できなか

ったということで，Ｚｏｏｍを通して授業を行うことによって，中止せずに遠隔操作でこのように授業を行うことができたということでございます。

それから右側のスライドに鍵盤が見えていますが，こちらは北昭和小学校におきまして無料ソフトを使用して学習用端末でピアノを練習している様子です。より簡単に練習ができるようになっているというところです。

次のスライドでございます。こちらはあさひ小学校の様子でございます。スライド左側では学習用端末の録画機能を使いまして，発表練習を録画してその発表の仕方等について改善点などを話し合うことができるというものです。右側につきましては，スライドによる外国の紹介ということでプレゼンテーションソフトを活用してまとめた資料を端末に映しまして発表している様子です。

このように各学校におきましては，様々な場面で学習用端末を始め，ＩＣＴの活用が進められている状況でございます。

続きましてデジタルＡＩドリル（学習支援ドリル）の導入につきましてもご説明させていただきます。本年６月に市立の中学校および義務教育学校後期課程の全ての生徒を対象に導入したところでございます。このデジタルＡＩドリルには，中学校の５教科でございます，国語，社会，数学，理科，英語と小学校の４教科，国語，社会，算数，理科の問題が収録されております。選択問題ですとか並べ替え問題，記述問題などに取り組むことができます。一人ひとりに合ったレベルやペースで学習することができます。取組の状況や，正解，不正解といったそういった結果なども学習の履歴として記録されます。

各学校におきましては，授業や休み時間，それから長期休業中の家庭学習などで活用しているところでございます。実際に活用している学校からは，「学習内容の定着が見られ始めている」，「学習意欲の向上に効果が感じられる」といった声も聞かれているところでございます。

続きまして，このようにＩＣＴの環境の整備を進めていますが，そこを支える，学校へのサポート体制として，教育委員会では学校ＩＣＴサポートセンターを設置し，各学校に学校ＩＣＴサポーターを派遣しているところでございます。この学校ＩＣＴサポーターは教員研修の講師の他に，端末の利活用や，運用に関する提案や助言ですとか，それから端末機器等の故障や不具合などのトラブルへの対応など，多岐にわたる業務に対応しているところでございます。

その他の取組につきましても，ご紹介させていただきます。これは研修に係わってでございます。生徒の情報活用能力の育成ですとか，ＩＣＴを活用した授業づくり，そして教員のＩＣＴ活用指導力の向上のために，南北海道教育センターにおきまして，教員研修を実施しております。また，指導主事による学校への訪問研修ですとか，先ほどご紹介させていただきました学校ＩＣＴサポーターを講師として派遣したミニ研修なども行っているところでございます。更にスライド右下には，「未来の学び通信」というものを掲載させていただいておりますけれども，学校の取組事例を共有したり，市民への周知を目的といたしまして，「未来の学び通信」を発行したり，それから昨年度は，教育振興フォーラムのテーマが「一人に一台の端末を活用したこれからの教育について」ということで開催をさせていただいたところでございます。

最後に不登校児童生徒への支援についてもご説明させていただきます。教育委員会では，昨年度末にＩＣＴを活用した支援を含めた資料として「不登校およびその傾向が見られる児童生徒への対策」を作成しました。そしてモニター事業も行っております。昨年度は２校，今年度は４校をモニター校としているところです。本通中学校さんもその中の１校であります。この事業の内容でございますが，学校の別室や家庭における支援の充実に向けまして，授業配信やオンライン教材の活用などについて，不登校生徒の状況に応じながら，試行的に取組を実施しています。また，現在市内では，学校には登校できるんですが，自分の在籍している教室には入れない生徒が別室，いわゆるサポートルームへ登校している状況が見られ

ます。現在ざっと人数を数えますと，市内全体で９０名ほどが，こういう形で通っている状況でございます。学校におきましてはそういった一人ひとりの状況に応じた支援が行われているところでございます。

以上のように，ＩＣＴ環境に関する教育委員会の取組，更にその中では，いくつかの学校の取組事例を紹介させていただきました。各学校におきましては，学校や児童生徒の実態，更には地域の実情に応じて特色ある教育活動が展開されているところでございます。教育委員会といたしましても，今後も各学校の教育活動がより一層充実していくよう支援してまいりたいと考えております。以上で説明を終わらせていただきます。

この後でございますが，本通中学校さんの方から学校の取組についてご説明いただく予定でございます。

■工藤市長

はい，それでは本通中学校のみなさんよろしくお願いします。

■本通中学校仲井校長

本通中学校校長，仲井と申します。よろしくお願いいたします。今日は本通中学校を総合教育会議の会場として，現場の子どもたち，それから学校の実態を見ていただく貴重な機会をいただきまして本当に感謝申し上げます。日頃，保護者や地域のご理解，ご協力に支えられながら，今，コロナ禍ですけれども，教頭を中心に先生方で様々な工夫を凝らして，なんとか教育活動を進めている状況です。

ＩＣＴの効果的な活用ということと，それから不登校生徒への支援というのが本校にとっても大きな課題となっています。単に数値だけで不登校を語ることはできないと思うのですが，本校では例えば，市立函館病院の小児科医とメールで繋がって事前にお子さんがそちらへ診療を受けに行く前に，情報の共有をしたり，また，２２名の不登校傾向にある生徒がいますが，そのうち，昨年度から開設したサポートルームを活用し，学校に登校，そして学習支援として，約半数の生徒，現在１２名の生徒がサポートルームを活用しているという状況にあります。

このあと，本校の端末の活用，それから各教科における大型ディスプレイ，ＡＩドリルの活用の実態を，教頭から説明させていただきますので，どうぞよろしくお願いいたします。

■本通中学校菅原教頭

本通中学校教頭，菅原と申します。よろしくお願いいたします。本校のＩＣＴ推進についてご紹介いたします。

まず，モニターの画像ですが，こちらは先月実施されました本校生徒会役員選挙立会演説会の様子になります。本来であれば全校生徒が体育館に集まり，立候補者が演説を行うものですが，こういう状況の中，感染拡大防止のため，ビデオ会議サービスを利用し，左側の画像にあります通り，立候補者は別室にてＰＣを通してそれぞれの思いを全校に伝え，生徒は教室の大型モニターを通して立候補者を応援しております。

本校のＩＣＴ推進の事例につきまして，学習，校務，その他としては不登校生徒の学習支援を中心に，ご紹介させていただきます。

まずは学習の効率化に向けた取組について，端末の使用状況，それからデジタルＡＩドリルおよびＩＣＴサポーターの活用の３点に分けてお話しさせていただきます。

初めに本校の端末の使用状況につきまして，令和４年度全国学力・学習状況調査，生徒質問紙の結果を基に報告させていただきます。同質問紙におきましては，活用の視点が３つ示されております。

１つ目は，授業において「自分で調べる」場面での活用はどうかという点であります。画面左端は全道平均，その隣が全国平均ということになります。今年度本校では週３回以上使用しているという質問について，生徒のおよそ７１％が，「自分で調べる」という学習場面で使用されているという回答がありました。

２つ目の視点につきましては，授業の中で，自分たちで「意見を交換」するという学習場

面での活用はどうか。こちらの方も本校では７６％という数値が出ております。
３つ目の視点につきましては，自分の考えを「まとめ，発表する」という場面での活用はどうか。その視点においては本校では６２％という結果が出ております。相対的に見ますと本校では積極的に端末が活用されているという状況にあります。
その結果，本校生徒の大部分，９７％の生徒がＩＣＴは学習の役に立つということを実感しております。一方でこちらのグラフ，左側に全道・全国とそれぞれ１８％，１９％とあるんですが，こちらの項目は平日勉強のために１時間以上，ＩＣＴを使用する生徒の割合を示しております。この項目において，本校生徒につきましては，２０％というように全道・全国平均値と拮抗しております。そこでＩＣＴ活用の裾野を広げていく，その取組を本校の次のステップと捉え，今年度６月に函館市より提供されておりますデジタルＡＩドリルの効果的活用を進めることにしております。その事例を数学，英語の順に紹介いたします。
数学科におきましては，デジタルＡＩドリルを，授業導入時の前の時間の復習や，展開の段階では習熟の程度に応じた問題演習，まとめの段階では評価問題として，または学習の復習として活用しております。
例えばということで１つ具体例を挙げたいと思います。こちらは連立方程式の学習になります。連立方程式の学習におきましては，問題がこのような形で提示されます。この問題に対して生徒は別紙で計算を行い，解答欄に解答を入力するという作業を行います。ご覧いただいている画面は解答を間違えた場合の例になっております。間違いがあった場合はすぐに類題を求めると同じ傾向の問題が提示されます。非常に手軽に短時間でできるまで繰り返し学習したりすることが可能になっています。併せて自分の学習の理解の状況を把握し，それに応じて学習することが可能になっております。モニターの中にＡ，Ｂ，Ｃ，Ｄという４つの段階が示されておりますが，これは理解の状況に応じてＡからＤまでの難易度の異なるメニューを選択することができます。こういう形で自分の理解に応じた学習に取り組むことで，それぞれの理解を高めることができております。知識ですとか技能の定着については，かなり効果が見られております。
次にスライドでお示ししますのは，連立方程式の学習内容ごとの生徒の正答率を表しております。１学期終了の際，この正答率を基に夏休み中の学習課題を配信しました。休み中の生徒の課題の取組の進捗状況というのは，一覧のような形で個別に把握することができます。〇は正解を表しております。×は不正解だったという状況を表しております。このように生徒個々の進捗状況を観察しながら，滞り気味な生徒には励ましのメッセージを個別に送信することができますので，生徒のモチベーションを維持したり，夏休み明けに課題を一気に回収し，それをすべて採点する等の業務の集中の解消にも成果を上げている形です。
次に英語の事例を紹介いたします。本校英語科ではコミュニケーション活動を重視した学習活動を取り入れています。「Discovery Japan」という単元では，知識・技能を習得した後に，日本文化の良さを紹介するという活動があります。その活動を通してスキルの習熟，併せて google のアプリケーションを用いて，情報の収集や整理等に取り組み，学習の幅や奥行きを広げていきます。この後，校内視察におきまして，３年Ｃ組の授業の中で大型モニターを活用したプレゼンテーションの場面をご覧いただくことになっております。
３つ目ですが，ＩＣＴサポーターの活用について紹介いたします。昨年度まではＧＩＧＡスクールサポーターという形で，主にハード面の管理にご尽力いただきました。今年度は，サポーター来校の折に授業参観を実施していただき，「今日の授業では，この場面でこんなＩＣＴの活用の仕方があります」という具体的な提案を，訪問対応レポートとして学校全体で共有するようにしております。先生方個々のＩＣＴの活用の幅をより広げるということをねらいにしております。
一方で，利用するコンテンツの幅が広がるほど，不具合も生じております。具体的には，ログインできなかったりという不具合等がございますが，本校では，ＩＣＴサポーターの専門的な力により解決した事例が非常に多くあり，今後も欠かせない存在であるというふうに

感じています。
　続きまして，校務効率化に係る事例を紹介いたします。本校では，教育活動の充実と向上に向けた取組の一端として，これまで，情報共有のデジタル化を進めてきております。その取組事例を１から４までの４つに分けて紹介させていただきます。
　第１に，日常行われております校内の情報共有につきましては，本校では３つの手段を用いて職員間で情報を共有しております。
　１つ目は，従来より行われてきております日報という紙を使っての情報共有です。今日１日の動きや連絡，職員の動向，季節によりましては暑さ指数等を共有するようにしています。
　２つ目は，校務支援システムです。こちらの方で研修案内や中期的な連絡，それから集約物等を共有するようにしています。
　３つ目はファイル送信システムです。こちらは指導報告や事故報告，緊急情報など，こういったものを共有しております。特に１０月は北朝鮮によるミサイル発射等，安全安心に係る重要な出来事がありましたので，そういう函館市教委からの通知等も含めまして，先生方に一斉に共有するようしております。こちらのシステムは，職員１人ひとりにデータやメッセージを送信することができるものであります。同時にポップアップ画面で表示されますので，「知らなかった」とか「見ていなかった」という現象を回避するシステムを利用しております。
　第２に，保護者との情報共有についてです。本校では今年度，これまで利用してきております安心メールに加え，もう１つ別のデジタル連絡ツールを採用しております。学級通信や各種説明会の資料等，ＨＰに掲載できない情報をＰＤＦデータで該当の保護者に直接送信するようにしております。画面にありますのは，今年度の本校の文化祭のプログラムです。個人名を含め，個人情報が非常に多いので，ＨＰに掲載することができないため，これまでは紙で配付しておりました。今年度からはこのツールを用いて，各家庭にＰＤＦデータで直接送信するようにしました。時には生徒が保護者へ見せるのを忘れてしまったり，保護者が「知らなかった，聞いていない」という状況が生じておりましたが，本ツールにより，そういう状況を回避することができるようになっております。情報共有がこれまでよりも迅速に，正確にできるようになっているというのが最大のメリットではないかと思っております。本ツールにつきましては，無料サービスではなく，年間で２００円弱の有料サービスになっておりますが，新規に料金は徴収せず，これまでのＰＴＡ会費から通信費として対応するようにしております。
　続きまして，モニターには，学級通信の一部を表示しております。こちらも個人情報が非常に多くありますので，紙で配付しておりましたが，先ほど同様，ＰＤＦデータの送信に本年度から変更しております。本校には生徒がたくさんおりますので，学校が発行する紙は学級通信等の通信類で，年間４万枚を大きく越える枚数になります。可能なところからＰＤＦデータに徐々に置き換えていくことでコスト削減の効果も生まれております。
　第３として，保護者からの欠席連絡につきまして，今年度デジタル化を一部取り入れております。コロナ等の感染症による欠席につきましては，「電話連絡をください」と保護者にお願いしております。それ以外の欠席については，デジタル化という形で進めるようにしました。コロナ禍の折，生徒の欠席連絡が格段に増えております。７：３０から８：１５までが欠席連絡の時間帯になりますが，日によりましては，その間，欠席連絡の電話のベルが鳴り続けます。結果，職員室内の先生方のコミュニケーションが，たびたび分断されるという状況があります。そんな状況を改善しようという思いで，本ツールで欠席連絡のデジタル化を始めました。画面のような形で保護者からの連絡というのが集約されます。こちらにはクラス別ではなく全校一斉にこういう形で集約することができますという画像を表示しています。学年ごと，それから学級ごとの集約というのももちろんあります。こういう形で，職員同士の連絡がこれまでよりも密になり，本校の生徒指導の支えの一端となっています。

第４として，google を活用した採点業務の自動化です。昨年度一部教科で試行しましたので，そちらを報告させていただきます。本校は全体で５２５名の生徒が在籍しており，例えば美術担当教諭は，全学級の美術の授業を担当しております。期末テストを実施した場合，担当の先生は，５２５枚の答案用紙を非常に短い期間で採点し，評価・評定をすることになります。そうした短期間に集中する業務を一部でも軽量化しようという形で，昨年度，Ｗｅｂによる解答を実施し，自動集計するという取組を第２学年の保健体育科で試行しました。具体的には，画面左側に示しておりますが，Google Forms（グーグル・フォーム）を利用して作成した問題に生徒が解答を入力します。記号問題は記号で，記述問題は記述でという形です。そうしますと画面中央にありますように，表計算ソフトに集約されてきます。画面で人的要因という表記は，これは生徒の書いた解答を表しています。１が正解，０が誤答という状況を表しています。このような形で自動集計される仕組みを利用することで，短期間に集中する採点業務が大幅に解消され，指導改善の時間の確保等，評価の充実を進めることができるようになっております。

最後にその他としまして，ＩＣＴを活用した不登校生徒への学習支援について，ご紹介いたします。本校では昨年度，不登校生徒の居場所を確保しようとサポートルームを開設し，生徒支援をスタートさせております。ご覧の画像が本校のサポートルームになります。運営の概要につきましては，ＨＰで保護者に周知し，個別の学習計画に基づいて，生徒は学習に取り組みます。今年度からは空きの先生を配置し，支援の充実を図っております。

併せて，函館市教育委員会モニター事業と連携し，授業動画のコンテンツを利用することができるようになりました。その一部が今モニターで示しているものになります。先のデジタルＡＩドリル，それから画面のように，生徒の学習状況の記録を，モニターにありますように必ず先生方で共有するようにし，きめ細かな学習支援の一助という形で進めております。今後は，授業の動画配信や授業への遠隔参加等も，生徒の状況に応じて取り入れていきたいと思っています。

結びになりますが，本校では若手教員を中心にＩＣＴコアチームを編成し，そのチームを推進役に，月１回，短時間で，教員のスキル向上を図る研修を行っております。

今後もＩＣＴ活用の目的に準拠した取組を推進していきたいと思っております。今日は取組の一端を紹介させていただきました。どうもありがとうございました。

■工藤市長

はい，どうもありがとうございました。教育委員会の取組と，本通中学校の取組をご紹介いただきました。みなさんからご意見等を伺う前に本通中学校の校内の見学をさせていただきたいと思います。

――本通中学校視察――

■工藤市長

ただいま，本通中学校の見学を行いました。また，先ほど，本通中学校の取組についての説明もありましたが，見学の感想も含めて，どなたか感想などいただけますでしょうか。

まず辻教育長からお願いします。

■辻教育長

子どもたちがすごくのびのびと勉強していて，いい雰囲気だなと思って見ていました。

ＩＣＴに関しても，市内全体の評価で見ると，やや小学校が先行してたかなという感じがあって，中学校は少し遅れ気味だなという印象をもっていたんですけれども，今日の様子を見ると随分馴染んできていて，普通に道具として使っているなと，最初に思ったのはそういうことですね。また後で少しお話ししたいと思います。

■工藤市長

ＧＩＧＡスクール構想で端末を導入したのは２年前かな。令和２年度で導入したからだい

たい２年くらいたっているのかな。
■白川学校教育課長
　１年半くらいですね。
■工藤市長
　１年半くらい。それにしてはみんな使いこなしているね。小・中学校全部に入っているんでしょうか。
■白川学校教育課長
　はい。
■工藤市長
　分かりました。はい，その他の委員の方。藤井委員。
■藤井委員
　教頭先生の発表で「自分で調べる」という調査項目について，全国・全道平均を大きく上回って７１％，「意見交換」７６％，「まとめ，発表」６２％，すごいなと思ってました。実際，授業参観しまして，なるほど，こういう状況ならば，こういう数値が出るんだなと思っていたしだいです。やっぱりこういうふうに活用していって，「自分で学習する」という調査項目では２０％のところも，ドリルとかを使って家でやることによって，更に割合が上がるんだと思うんですね。非常に感心しました。
■工藤市長
　ＡＩドリルを導入したのは，学年的には。
■川村生涯学習部長
　中学生ですね。
■工藤市長
　中学生全員ですか。小学校にはまだ導入してなかったの。次の課題は小学校に導入していくこと。
■小葉松委員
　ＩＣＴに関しては，子どもたちは順応性が高いので，使いこなすのも覚えるのも非常に早いだろうなと見ていて思います。実際に子どもたちを見ていても思いますが，必ず物事は，良い面と負の面と両方持ち合わせていて，今，たぶん先生方がＩＣＴを非常に一生懸命に導入してくださって，それは大変素晴らしいことですが，これから負の側面を，この先，誰がどんな形で検証していくのかなと思っています。
　私は職業が医師なので，子どもたちのコミュニケーション能力ということに関しては，この１０年や２０年でだんだん落ちてきているような印象をずっともっていまして，私自身，性の教育の出前授業でいろんな学校でお話しをします。性というのは基本的に人との関わりなので，その中で最近とても気になっていることです。主に高校生ですが，「どうやったら彼女ができるんですか」，「どうやったら彼氏ができるんですか」と聞かれます。人と普通に関わって，相手の気持ちを判断するということが非常に苦手な子たちが増えているような気がして。もちろんＩＣＴが悪いわけじゃないですが，私たちも情報を取るのに，ネットで検索をかけると，非常に狭い分野を深く掘っていくことに関しては，すごく優れているなと思いますが，広くいろんな人の意見を聞いたり，それから世の中のいろんなことを認識するということに関しては，これから先の子どもたちにとって果たしてどうなんだろうといつも疑問に思っています。それでなくても少子化と言われている原因は，もちろんいろいろあります。経済的な問題もあるんですが，ほどほどの適齢期にパートナーを自力で見つけることが難しいという若者が増えているのは，たぶん間違いなくて，昔のようにおせっかいなおじさんとかおばさんがいて，ここに独身の若者がいるよとか，女の子がいるよとかそういうこともなく，それこそＩＣＴでマッチングという業界も出てきていますけど，中学校の生徒にとっては，ずっと先のことかなと思うかもしれないですが，私自身の仕事と重ね合わせるので，そういう人と人とのコミュニケーション能力に，このＩＣＴがどういうふうに影響を及

ぼしているのかを，誰かが検証する必要があるんだろうなと思いながら，今日拝見してきました。感想です。以上です。
■工藤市長
　コミュニケーション能力の低下というか，コミュニケーションが取れない状況というのは学校，子どもに限らず地域でもいろんなことが起きています。やはり昔のように，隣近所の付き合いもあまりなくなってきていますし，子ども同士の地域でのつながりも薄くなってきて，学校に来れば友達には，子ども同士は会えるけれども，地域に戻った時になかなか。家庭は家庭で，親は両親とも働いていて，帰っても誰もいない。昔は兄弟が３人も４人もいる家族があったけれども，その点が社会的な影響というか，そういう環境で必然的にそうなっているような気がして，それをどうやって。なかなか学校教育だけに，それを任せるという状況ではないですね。教育委員会だけで解決できる問題ではないと思います。
■辻教育長
　小葉松委員の前半の話題は教育委員会でも話題になります。議会でも議論されています。ＩＣＴを一生懸命使うというのはいいんだけれども，それによる負の側面というのは常に議論しているところなんですね。おっしゃる通り，今たぶん，とにかく使ってみようよという時期なんだと思っているんです。やがて落ち着けば，必要になってくるのは，今はコミュニケーションの話題でしたけれども，他にも学習指導という視点に立ったとしても，使えばいいというものではないというふうに，だんだんなってくるはずなんですよね。例えば，５時間とか１０時間とか，１つのまとまりがある単元の中で，ここの場面で使えば効果的だとか，ここの場面はむしろ使わないほうがいいという場面がきっと出てくるはずなんですよね。ただ，今はちょっとやってみようというような時期だと思うので，やがて落ち着いてくれば学習指導面においても，そういう議論がきちんとなされて，効果的な活用，学習指導上の指導方法の工夫という観点で，議論が落ち着いてくるのではないかなという気持ちはします。今はとにかく使ってみようという時期だというのは否めないです。それは「やってみようよ」と言っていますし。
■工藤市長
　まあまだ１年半でしょう。
■辻教育長
　そうですね。
■工藤市長
　まだ結果を出すのは，早いだろうけども，なんか家に閉じこもってゲームをやっているのと同じで，家に閉じこもって数学ばっかりやっていて友達との付き合いがなくなっていくという危険性がないわけではないような気がする。
■辻教育長
　そうですね。
■工藤市長
　それはやっぱり使わせ方，教え方，いろいろ教育の現場でもどうすればよいか，防げることがあると思いますが，どうですか。
■神田委員
　今日はすごくいいものを見せていただいたなあというのが印象です。
　まず保護者として，先ほど教頭先生からお話しもありましたが，保護者との情報の共有の部分ですね。確かに先日のＪアラートの時に，スクリレ（デジタル連絡ツール）で直ぐ情報が来ました。「少し学校には来ないでください」，「待ってください」というのは有り難かったですし，プログラムの方も紙でもらうよりも，私個人的にはこのような情報でいただけると大変有難いなと思います。学校との情報共有は，保護者としてはとても安心しますので，これは本当に進めて行っていただきたいなというのが，たぶん他の保護者の方も思っていることかと思います。あと，先ほどの小葉松先生のお話しを伺いましたが，確かに子ども

たちのコミュニケーションは，私も親として昔の子に比べれば少ないなと実感しております。そこでやはりコミュニティ・スクールではないですが，地域の方と自分の子ども，お父さん，お母さんとは全く関係ない他人と言ったらおかしいですけど，地域の方々と学校を通じて少しでもコミュニケーションを取ることで，人との触れ合いを学んでいっているなというのを，最近，実感しております。これからは子どもたちの間でも，そういうコミュニケーションが取れるような環境ができたらいいのかなと今，先生のお話を伺って感じたところでございます。以上でございます。

■工藤市長

はい，ありがとうございます。私，今ね，学童保育をよく視察しているんだけれども，あれは非常にそういう意味ではコミュニケーションを取る場になっている。１年生から４年生くらいまでいるんでしょ。まあ５・６年になるとほとんど学童保育に預けられなくなるが，お兄ちゃん，お姉ちゃんがいっぱいいたりね，下の者がいたりでなかなか活発ですよね。ああいうものが無ければ，今，なかなかそういうチャンスも無いのかなと。まあ団地の子どもたちは結構元気にやっているんだけれども，今，団地も老齢化しているから団地に子どもがいないという状況だから，学校でしか触れ合わないみたいな時代になってきている。なかなか難しいなと思っているんですよね。まあ部活動だとかやってれば，またちょっと違ってくるのかなという気はしますけど。國谷さんどうですか。

■國谷委員

私はですね，最初，ＩＣＴと聞いて，タブレットをいじったりという学習が，はたして脳の発達とか，中学校の時期にいいものなのかどうかというのが，自分の先入観において，そういう感じだったんですけど，実際，授業を見させてもらうと，旧型の黒板を使って文字を書かせるとか，そういうものとＩＣＴをうまく融合させた形で授業を進められてますので，そういう部分では，うまく活用しながら従来型の授業もやっていくというような感じで，いいんじゃないかなというふうに思って見ておりました。

それと最近，道新ですかね，ＩＣＴのサポートをする，要は不慣れな先生などに対してそれをサポートしていくＩＣＴサポーターの人たちの数が少ない。今後，それを増やしていかなくてはいけないというような課題だとかを目にしたんですけれども，やはりみんながみんな得意なわけではないと思うんですが，どっちかっていうと生徒は順応性があって適応していくと思うんですけれども，学校の先生は令和３年度から始まったこの動きに，ベテランの先生ほどなかなか順応できない部分があるのかなというふうに思いますので，みんなが同じような水準を保つためには，そういうＩＣＴサポーター，そういうのもますます必要なんじゃないかなと思いました。

あと，負の側面というところになるのかもしれないですけど，この今の世の中，パソコンなくして仕事も成り立たないという状況で，一部そのコンピューターウイルスとかランサムウェアとかで機能不全に陥らせて，身代金を請求するみたいな，そういうことも全国，まあ大きな病院でもそんなことがあったかと思うので，例えば，人からもらったＵＳＢをパソコンに差し込まないとかですね，見知らぬ添付ファイルについてはメールは開かないとか，その辺の生徒に対する指導であるとか，あるいは学校の先生そのものが，そういうパソコンのセキュリティの問題に関して，しっかりとした知識を身に付けていかないと，ＩＣＴを導入したはいいけれども，万が一そういう事故があった時に，全く授業ができなくなってしまう，そんなこともあってはいけないんだろうなと思って，情報セキュリティを同時並行で導入していただけたらなと見ておりました。感想です。

■工藤市長

ＩＣＴサポーターは，今何人いるの。

■川村部長

５名です。

■工藤市長

小・中合わせて？
■川村部長
はい。
■工藤市長
学校を回って歩いているのかな。足りているのかな。まあ１校１人というのは難しいかもしれないけれども，教育委員会としてはどうですか。
■辻教育長
もうちょっといればいいかなと思っていますけど，あとは，この後，何年間それを付けられるかということだと思います。やがては自立していく必要あると思うんですけれども。
■工藤市長
それはそうですよね。
■辻教育長
ええ，ただもうちょっと手助けが必要な気がします。
■工藤市長
これからの新たに加わってくるというか，新たに先生になる人たちは，だいたい使いこなせる人ですよね。
■辻教育長
まあそうですね。市長，実は今日，ＩＣＴサポーターご本人もいらっしゃるので，山本さんから何か情報あれば。
■山本ＩＣＴサポーター
ＩＣＴサポートセンターとしては，まず学校の職員の方とある程度コミュニケーションを取ることを第一にして訪問しています。
市内の様子としましては，まず小学校については，低学年からプログラミングのアプリケーションを使いながらプログラミング的思考を育むような取組をされているところです。それをさせてる先生方も子どもたちの順応性に関してはすごく驚いている様子ですね。あと，昨年度と比較しまして，低学年からタイピングだったりとかプログラミングをさせてる学校が非常に増えています。なので，スモールステップではありますけれども，順調に活用の方は進んでいるのかと思っています。あと，中学校につきましては，今，Google のアプリケーションの使い方から，実際の利活用の部分について細かく教えているところであります。
実際には授業を支援しながら，授業の終わりに少しお時間をいただいて，「こんな使い方ができますよ」というような教材サンプルを事前に作って提示して，先生方に気付きを与えています。
あと，研修につきましても，ＩＣＴ機器の操作だったりとか，Google のアプリケーションの操作方法についての基本的な部分のレクチャーだったりを行っています。あと，先ほど國谷委員からのお話しで出た情報セキュリティについても，教育現場における情報セキュリティに関する研修を行っています。まだ今年度は，だいたい３分の１程度の学校で研修を進めているところです。
一方で課題もありまして，１つはＩＣＴを得意とする先生や得意じゃない先生がいるということですね。あともう１つ，先生自体がＩＣＴ機器を使えないから，子どもたちに使わせられないという考えをもっている先生も中にはいます。でも，我々としてはそういった先生方に，その先生が元々もっている強みやできることに着目してそこを我々と一緒に伸ばしていこうというようなコミュニケーションの取り方をしています。
とはいうものの，やはり苦手意識はなかなか抜けないですが，一緒にいるからやってみようというような気持ちが少しずつ先生方の中に芽生えてきて，メンタル的な部分もスモールステップで順調に利活用の方は進めています。やはり自立化，先生方が自らが使えるようにしないといけないと思いますので，ある程度，長いスパンで見て計画立てて進めるのがいいんじゃないかなと，我々はそう思います。以上です。

■工藤市長
　はい，ありがとうございました。プログラミングの話しが出たんですが，先日小・中学生の全道プログラミングコンテストが，中央図書館で，小学生１０名，中学生１０名による全道から勝ち残った人たちの最終審査がありましたけど，私は，小学校の部分の途中まで，ちょうど函館から４人参加していたんですけれども，その４人が終わって，ちょうど５分の休憩になってそれで抜けました。中学校の方は知らないけれど，これはすごかった。
　小学生２年生，３年生なんだけれど，環境問題をテーマにしたゲームをきちっと作って，ゲームの発表をやって，そして檀上で自分の思いとか，いろんなことをプレゼンテーションする。とてもじゃないが２年生，３年生とは思えない。もうすごいなあと思って，今の子どもって，こんな子どもたちいるんだなあと思って，高学年はもっとすごかったけれど，本当に感心しましたね。これ多分，今までの子どもたちと違う子どもたちが生まれつつあるなという感じがしました。だから将来そういうふうに進んで，アメリカのビルゲイツさんみたいになりたいという６年生がいたりして，もうまるっきりプレゼンテーションに臆さないというか，全然ひるまない，自信満々で２年生，３年生がやっているのを見た。すごいよね。こういう遊びから入っていきながら，そして，それがこう性格とか人格形成に結びついていると。物怖じしないし，堂々たる雰囲気だなあと思って，非常に良かったなあというふうに感じていました。
　私が市長になったときから，あるいは市長になる前から言っていたんですが，これからの子どもたちというのは，大人になってビジネスの世界で生きていくために必要なのは，コンピュータと英語力だと。この２つはもう必須だと。それがないと活躍できない。それを今回もすごく，それをもっと強く感じた。情報機器，ＩＣＴを自由に駆使できる力。それから世界に通用する，いわゆるグローバル化している中で，世界共通語としての英語の２つがものすごく大事で，これを習得していれば，まず食いっぱぐれることはない。いろいろお話しを伺いましたけれども，何かありますか。
■小葉松委員
　今の市長のお話しにあったすごい子どもたちっていうのは，たぶん自分たちでどんどん調べていく能力があって，それで，インターネットの良いところは，分からないことはインターネットに聞くとだいたいいろんな答えが出てくるはずなんですよ。私もこういうＩＣＴの使い方を誰かに習った世代ではなくて，仕方ない，必要だから探しながら，調べながらやるかとやってきた世代なんですね。２０年くらい学校の出前授業を行っていますが，最初の頃はパソコンを持って行っても，プロジェクターに繋げられる先生が１校に一人くらいしかいなかった時代もあって，先ほどのサポーターの方のお話しからも，やっぱり教えてもらってなんぼというような意識が先生方の中にあるのかなというのは，いつも思っていて，今でこそ，だいぶ変わってきましたが，分からなかったらネットで調べれば，だいたい，例えば，「Ｚｏｏｍでどうやってホストをやるの」とか，「プレゼンはどうやってするの」とか調べれば全部出てくるはずなんですよね。なので，サポーターがまだ必要だという意見も確かにあるんですけど，もしかしたら先生方の中には，こういう使い方って誰かから習って，初めてできるようになると思っている人がいるとしたら，全然そうじゃない，一般の普通の民間人とかでは教えてくれなきゃ自分で調べるしかないと思って，習得している人たちもいっぱいいるので，そこら辺はサポーターをあてにするばかりではなくて，分からないことがあったら，これはどうやってやるんだろうと，グーグル先生に聞けばいいみたいな，そういうのもものすごく使えるはずなんですね。ですから，今のサポーターの方々には頑張ってほしいんですが，まだ教えてほしいみたいな先生には，そういう意識の改革も是非お願いしたいなと。子どもたちは多分，みんな自分たちで調べて，自分たちでスキルアップしてるんだろうなと私は思っているので，意見です。
■工藤市長
　やっぱり子どもの方が柔軟性がありますよね。

■小葉松委員
　まあそうなんですけどね。
■工藤市長
　それはもうかなわない。そういう機械とかゲームとか，なかなか，かなわないですよ。だいたいＩＴの世界自体がね，よくソフト開発とかゲーム開発とかをやってる会社，東京にかまえている会社は，もう若い人ばっかり。もう４０過ぎたらそういう現場ではできない。だから営業に回ってもらうと言っていた。そういうついていけなくなる，年齢的に，スポーツと一緒。そんな世界ですよね。かえって子どもの方がいろんな可能性があるんだろうなというふうに思います。
■藤井委員
　負の側面の話が出てきましたが，私もこの２０年来，負の側面の被害に遭わないようにずっと情報モラルといいますか，いろんな調査をしているんですけど，その調査の１つとっても２５年前は郵送で送って，返ってきたのを全部エクセルに打ち込んで，だからすごい時間がかかりましたよね。ところが，１０年前くらいになりましたら，マークシートになったので，返ってきたデータは一瞬にして処理できるんですね。それで最近ですね，やっぱりいろいろ心配なこともあるし，コロナ３年目にもなりましたので，校長会にお願いしまして小学校５・６年生でのネットに関するアンケートを依頼しましたら，すべて Forms（フォーム）のＱＲコードをメールで送るだけで，今朝見たら８００件くらい回答が入ってくるわけですよね。やはり時代が変わってきているのとですね，今，子どもたち，僕らが自転車を覚えた時みたいに，自転車を覚えたてというのは，なんか自転車を乗るというのが目的になって，だんだん全部使いこなすと，別の目的に利用するとなりますけど，今は，そういう段階でいいと思うんですよね。
　それで文化人類学的に言うと，文字の発見というのは良かったかどうかという人がいますよね。つまり文字が無かった時の人間のコミュニケーションの豊かさと，文字が発見された，その文字が入った時の社会というのは，またちょっと違った。ただ，それを補うように文字の入っている社会というのは，どんどん，どんどん，ほかの能力を身に付けてきたんだろうと。そして今は，その文字の次に起きてきたのがＩＣＴだと。ＩＣＴはもう，ＩＣＴを介する，そういう文化になっていくんだと思うんですね。だからその負の側面は，おそらく長く使っていくうちに，人間というのは，また違う能力を身につけながら，このコミュニケーションをもって，ＩＣＴの中で生きていくと思いますので，なので今は，じゃんじゃん，子どもたちに使わせていくのは，すごくいいなと改めて感じたところです。
■工藤市長
　今，聞いていて思ったのは，文字とか言葉と違って，face to face という感じがなくなってきて，リモートとかそうでしょ，テレワークで働いているとかね。会社に１か月に一遍顔出すとか，あとはずっと自宅で仕事をするとか。face to face というのがだんだん失われて，コミュニティがもっと失われていくような気がして，私の場合は face to face はきっと大事だよねと思っていて，それが失われていく怖さというかね，どういう社会になっていくのかなと心配もずいぶんあるなと。便利なんだけれども，じゃあその便利にまかせて一人ひとりが顔も合わせないで触れ合わないでやっているような。一体感がないというか。企業，役所もそうなったら全然一体感がなくなってしまうよね。すごい心配はありますよね。学校だとかも，最終的に，じゃあ校舎なんかいらないんじゃないかとか，自宅と先生をつないでやったらいいとなったら，どんな子どもになるのか。そのへんはね，これから，まあどんなふうに進んでいくか，今，そんなこと心配する必要ないかもしれないけど，将来的には随分心配だなと思っています。
■神田委員
　先程，ＩＣＴサポーターの山本さんの方から，先生によっては，活発に使う先生とちょっとなかなか，という先生がいらっしゃるというお話しを伺って，保護者として，自分の子ど

もが通っている学校で，活発に使っている先生に自分の子どもが教えていただいている場合とそうでない先生に自分の子どもが教えていただいている場合とがあると思うと，細かい話なんですけど，気になるというのが正直なところで。たまに私も子どもに聞いたりもするんですが，やはりこのご時世，パソコンがなければ，プレゼンテーションもできないと，今後いろんなことが社会に出たときに必要になっていく中で，私たち世代は，なかなか自分の子どもに教えるのが難しくて，学校で学ぶことができるということは，親としては心強いですし，負のものも学校でみんなと一緒に教えてもらえて，それを先生にご指導していただいて，守られた中で負のものと良いものを見ていけるということは保護者としてはとても安心していて，子どもたちを学校に行かせているんですが，活発に使われる方と使われない方がいらっしゃるとなると，その部分では頑張っていただきたい。同じ数学を受けても英語を受けてもみんな子どもたちが同じような能力を，それ以上の能力も必要ですが，できたらいいかなと思いました。

それと，先程の市長のお話しで，face to face も重要だというお話しを伺って，ふと思ったんですけれども，ＰＴＡの保護者の方も，なかなかコロナで集まって学校を盛り立てるということが厳しくなってきていまして，かえって教頭先生や先生方に負担をかけてしまっているのではないかと思っていたところです。顔を合わせないとなかなか当事者意識が出なくて，自分の子どもが通っている自分の学校を，子どもたちの学校をなんとか盛り上げていこうという意識がちょっと薄れてきてしまうのかなというふうに思いました。なので，コロナではありますけれども，改めて，コミュニティ・スクールの中で地域や保護者の人たちも，またＰＴＡの組織を，今までの形ではなく，新たな形に変えながら盛り立てていけたらいいのかなと思いました。

■工藤市長

よく分かりますね。ＩＣＴが進んでもやっぱり，子どもと先生の関係というのがきちっと密接でなければ，こういう機器だけでやっていると，先生の子どもに対する愛情というのも育たないし，逆に子どもが先生に対する親しみも湧かないし，というようなことが若干危惧されるというのはありますね。あまり進んじゃうとね。今はまだ，そんな段階じゃないから，そんなに気にならないという気がしていますけれども。

このコロナで，例えば違う小学校から集まってきた１年生，２年生はお互い顔も分からないということがあるわけでしょ。お互いの顔が分からないで給食も前を向いて食べている。対面で食べてないんでしょ，今。

■辻教育長

対面では食べてないですね。みんな同じ方向を向いて食べています。

■工藤市長

短大の学生さんは，２年間しかないのに１回も友達の顔が分からない。一緒にご飯を食べたこともないし，コンパをやったこともないし，何にもやったことない。文化祭もないし，マスクを外した顔を見たことがないから，友達感がないと嘆いていた。ひどいもんだなと思ってます。

せっかく本通中学校で開催していただいたので，校長先生，教頭先生で，こういう課題があるとか，こういうことを是非というような，この際，忌憚のない，文句も含めて。

■本通中学校仲井校長

それではせっかくですので。先程校舎を回りながら市長にもお話しさせていただいた部分もあるのですが，こういう機器を使うにあたって，どんどんいろんなものを入れていただいてありがたいのですが，ものがたくさん入ってくると当然，置く場所だとかそういう部分で，キャスター付きのものを入れていただくと，このように活用したりしているのですが，入れちゃうと今度，給食の台と教卓の関係で，電源保管庫の居場所がないねということで，とりあえずぎりぎり廊下に置かせてもらっているという状況です。なにかこう改善する手段がないかと考えてはいるのですが，自分たちで考えて，例えば壁置き，壁付けがいいよねと

か，校舎のつくりの関係で素人ではどうにもならないということもありますが，しのいでいこうという状況があります。
　それから先生のＩＣＴの活用については，教頭先生がＩＣＴサポーターさんからいろいろ教わってそれを若手の先生方に伝えながら，その先生方でミニ研修みたいな形で，職員会議のあとで先生方に使い方を説明しながら，徐々にですが先生方のスキルを高めています。今ご意見，ご指摘いただいたように，ぐっとやれる先生となかなかよく分からないという先生がいるのが現状ですので，なんとか改善していきたいと考えております。以上でございます。
■工藤市長
　分かりました。なかなか，神田さんが言われることも分かるけれども難しいですね。
■辻教育長
　先生による違いというのは，今，ＩＣＴの話題だからＩＣＴを使うか使わないかで目立ちますけど，他でも山ほどあるわけですよね。子どもの扱いが上手な先生もいればダメな先生もいて，授業が上手な人もいる。私が言うようなことではないですけど，あまり言いたくないですけどね，そういう個人差というのは，永遠の課題でございます。
■工藤市長
　そうですよね。私もそう思いながら，保護者としては分かるけど，なかなか難しいよねと。どの社会でも，それは学校に限らず，市役所だってそうですし。差し支えがあるからはっきりは言えないけれども，ある程度はしょうがないんだけれども。
　小学校は６年生まで，中学校は３年生まで，全部同じ先生でもないんでしょ。中学校は教科ごとでしょ。そういうこともあるから，それはやむを得ないかなと思っていました。
■辻教育長
　違う視点で１ついいですか。あの，校長先生にもう１つ聞いておきたいことがあって，不登校のことです。
■工藤市長
　私も聞こうと思っていました。
■辻教育長
　そうですか。いいですか。先日，市内の中学校でサポートルームというのを作ってくださって，今，市内全体で約１００名の子どもが通って，この前集計してみたら，びっくりしたんですよね。私たちもね。ああいうふうにやることによる子どもとか保護者の反応が知りたいんです。どうなんですか。
■本通中学校仲井校長
　直接かかわっているのは先生方なんですけれども，自分も先生方からいろいろ聞くと，やはり保護者の方も，特に教頭先生が取りまとめてやってもらっているのですが，使う前に保護者の方と十分に面談して，こういう形で，こう使っていきますよと。そこに担任が入り，保護者の方も「本当に行けた」，「自分の子どもが行けた」と喜んでいる。中には，ハードルは高いんですけれども，学級に戻れたり，全然学級に行けなかったのに，週に２回，３回，４回，今年こんなに学級に行けるようになったということもあります。また，学級の子どもたちからのメッセージだとかをもらって行けるようになった子もいるし，それから勉強面では，ＩＣＴ，ＡＩドリルを使いながら，お母さん方も，本人も，勉強についていけないという不安は少し解消されてきているのかなと思っています。そして先生方が，何人か交代でサポートルームに入っているので，いろんな大人の人，いろんな先生と対面でコミュニケーションが取れて，将来，高校に行ってからかも分かんないし，仕事をしてからかも分かんないんですけど，人とかかわって信頼関係をつくれたということは，大きな自信にはなるのかなと思ってます。
■工藤市長
　そういう子どもたちって，中学校から高校に進学したときに変わって，高校ではきちっと

普通の学級でやっていけるの。
■本通中学校仲井校長
　そういう例もたくさん見てます。
■工藤市長
　環境が変わればということかな。
■本通中学校仲井校長
　はい。高校進学がきっかけで。
■工藤市長
　なんかこう，共通で要因というものはあるの。
■本通中学校仲井校長
　もともと本人がもっている性格だとか特性ということもあるし，先生との折り合いがつかなくて，友人関係で何かあったということも最近の子どもたちはあります。
■工藤市長
　行く場所があれば，ひきこもるよりはまだいい。この問題は，たしか校長会と話したときにも出ていましたね。
■辻教育長
　先生方の話をすれば，通常の学級とか特別支援学級は，都道府県教委の仕事ですけど，道教委から先生の配置がありますけれども，サポートルームにはないじゃないですか。だから，授業が空いている先生が交代で面倒を見ているということでいいんですね。
■本通中学校仲井校長
　そうなんです。空いている先生がということです。
■辻教育長
　本当はそこに専門の人が配置されれば，もっとうまくできるということはありますかね。
■本通中学校仲井校長
　そうですね。はい。
■辻教育長
　本通中学校は結構大きい学校で，先生方もたくさんいるんで，やりくりができる面もあるでしょ。
■本通中学校仲井校長
　大きいですが，ただ先生方も授業のコマ数を多くもっているので，ぎちぎちではあって，余裕をもってやれますということは言えないです。
■辻教育長
　分かりました。ありがとうございます。
■工藤市長
　小学校には，サポートルームというのはあるの。
■辻教育長
　今のところはないです。
■工藤市長
　中学校だけなの。
■辻教育長
　はいそうです。
■國谷委員
　サポートルームつながりでちょっと気になったことが。学んでいる生徒は圧倒的に授業のコマ数が少ないような気がするんですけど，それで高校進学とか，そういうところに支障なくやるために，どのような工夫をしているのでしょうか。
■本通中学校仲井校長
　端末を家へ持ち帰ることをこれからも考えておりまして，端末を持ち帰って学校でやって

いる授業を配信するとか，学校に来ているときは，じゃあ今日は頑張ってたくさん受けましょうねとか，やっています。
■本通中学校菅原教頭
　今，実際端末を持ち帰ってやっている生徒は３名おります。
■國谷委員
　そうすると，卒業する時点で学力的に高校進学が厳しいという子もいるのでしょうか。
■本通中学校仲井校長
　いや，もちろん，そちらの方が圧倒的に多いのが現状です。
■小葉松委員
　追加していいですか。授業に出ないで定期試験を受けないと通知表がオール１になります。学力と関係なく。なので，今，通信制高校なんですよね。通信制高校は市内にも今たくさんサテライトができていますが，中学校の成績に関係なく学べるので，一般的な普通高校に入ろうと思うと，入試を受けないといけないけど，通知表，内申がオール１だと入れる学校が限られるので。なんでこんなに通信制高校が増えているのといったら，不登校の一定の受け皿には，もちろん有朋高校とか定時制高校もありますけど，受け皿になっているのは事実だと思います。
■工藤市長
　不登校のサポートルームだとかフリースクールだとか，もう１つ話題になったのが，発達障害が多く見受けられるようになってきているんだけれども，それを診断できる医師がいなくて，１年くらい待たなきゃならないと。函館市では２人くらいしかいないのかな。それは教育関係者だけでなくて福祉の関係者にも言われているけど，なかなか難しいですよね。
　それで，全般的になんとなく感じているのは，いずれも人だなと。特別支援員は，前からもう少し拡充したいと聞いていますし，学校司書は先程見せてもらいましたけど，やはり効果はあるのかなと。それも人数が充足されているのか，されていないのか。まあ４校くらいもてるものなのか私もわからないけど。あとは部活動支援員，あとは免外講師。ここはこの規模だと免外講師はいらないのかな。音楽だとか技術や美術。いなくても大丈夫なの。
■本通中学校仲井校長
　ここは免外講師はおりません。なんとか皆さんで回してもらっています。
■工藤市長
　さっき言ったサポートルームの専属教諭など，人の課題が随分あるなと思っていました。
　皆さんから，ＩＣＴ以外も含めて何かありましたら，どうぞ発言していただければと思いますが。その他も含めてありませんか。
　昨年の戸井学園も面白かったんだけれども，あちらは小中一貫の義務教育学校だから，ちょっと違って，今日は，本来的な形の中学校を見せてもらいました。非常に，おもしろかったなと言ったら変かもしれませんが，楽しめたなと。
　なるほどなと，授業は今，こうやっているんだなと。これは寝ていられないよなと思って見ていました。みんな明るくてのびのびやっている姿が非常に印象に残りました。支援学級のお子さんも黙々と学習していて，いい環境のもとにあるなと。もちろん現場ではいろいろな課題もあるんでしょうけど，これからもがんばってやっていただければと思います。
　それじゃあよろしいですか。
　あと，令和５年度予算，２０２３年度予算に向けて，教育委員会から，教育委員の皆さんと予算の要望等も協議して，来年度の予算に反映していきたいと思います。幸いにしてここ数年，教育環境については，ＩＣＴも含めて環境整備が進んだかなと，それまではお金が無くてなかなか予算を付けてあげられなかったのが，最近ちょっと余裕があるから，少しずつ進んでいると思っていますが，これからも努力していきたいと思います。よろしくどうぞお願いいたします。

３　閉会

■金野教育政策推進室長

以上で本日の協議事項は，全て終了いたしました。

本日の会議の開催にあたりまして，ご協力いただきました本通中学校長の仲井様をはじめ，職員の皆様に改めてお礼申し上げます。

これをもちまして，令和４年度函館市総合教育会議を閉会いたします。

皆様どうも，ありがとうございました。